

監修にあたって

集中治療領域における比較的短期の生命予後は、集中治療医学の発展とエビデンスの集積、診療ガイドラインの普及などにより近年目覚ましく改善されてきています。一方で、ICUに長期間入室した生存者の多くは、ICU退室後さらには退院後も長期間に及ぶ、身体障害や不安・ストレス障害・PTSD（Post-Traumatic Stress Disorder）などの精神障害、記憶・注意・実行機能といった認知機能の低下が生じ、社会復帰が困難となっていることが明らかになってきています。これらは、Post-Intensive Care Syndrome（PICS）として広く認識されるようになってきました。一方、患者家族に対しても精神的影響のみならず介護のための離職や経済的な問題もあることが明らかになり、さらに小児のPICSにおいては、患児の発達への影響のみならず、家族や同胞への影響は、患児と家族の双方に複雑に絡み合って、織りなすように影響を及ぼしていることも明らかになってきています。これは、もはや医学的問題にとどまらない社会的な問題であると言えます。

集中治療は、救命を第一義とした時代はすでに終えており、現代の集中治療の目的は、救命の先にある社会復帰をも視野に入れたものでなければなりません。これには、PICSの正しい理解と対策が必要です。私が理事長を務める日本集中治療医学会では、それに向けた対策をいち早くとってきました。日本版敗血症診療ガイドライン2016においては、欧米に先駆けて、PICSを取り扱いました。2019年には「PICS対策・生活の質改善検討委員会」を立ち上げ、精力的に活動を行ってきています。委員会は、PICSの臨床や研究に携わる医師、看護師、理学療法士や作業療法士などの専門家からなるチームで構成されています。現在までに多くの質の高いエビデンスを発出してきており、PICS研究では我が国は先進国と言えるほどになってきているのは喜ばしいことです。

さて、日常診療の現場で、PICSの予防と対策を行うには、PICSの病態生理や発症要因を正しく理解し、多職種の連携やエビデンスに基づいた実践が必要です。しかしながら、PICSの言葉が浸透しているほどには、積極的なPICS対策は行われていないのが現状です。これは、多くの臨床現場でPICSに関する知識や経験が不足し、どのように行っていいかがわからないことが多いことが、その原因の一つと思います。本書は、中村謙介先生の編集で、「PICS対策・生活の質改善検討委員会」のメンバーが中心となって完成了ものです。PICSに関する基本的な知識から具体的な方法までをわかりやすく提示することで、PICS診療の普及と向上に貢献することをめざして企画編集されています。スコーピングレビュー やエキスパートコンセンサスをもとに、PICSの定義、原因、診断、予防、治療などが詳細に説明されています。さらには、啓発用のパンフレット、ポスター、さまざまなチェックシートや各種用紙のフォーマットのデータがダウンロー

ドできるなど、きわめて実践的で親切な内容に組み立てられています。後半には、PICS ラウンドや PICS 外来などの実施方法や事例も十分な誌面を割いて紹介されており、本書全般にわたって、要所に適切な文献もつけられているため、さらに深掘りした学習も可能となっています。PICS に関する書物も増えてきましたが、これほどまでにアカデミックでかつ実践的、真の意味で明日からの診療に役立つように工夫された内容の書物は他に類を見ません。これは、ひとえに、筆者たちのアカデミックなレベルの高さと、自らが日常診療の中で日々、工夫を凝らしながら実際に PICS 診療を行っていることの証であると思います。

本書をバイブルに、それぞれの施設において、質の高い PICS 診療が行われ、多職種による「患者・家族本位のより質の高い集中治療」が広く実践されることを願ってやみません。

2023年12月吉日

藤田医科大学医学部麻醉・侵襲制御医学講座

西田 修